

先進事例紹介②

#	登壇団体名	講演名
2	NPO法人日高わのわ会	取組事例の紹介

【発言要旨】

■ 団体の成り立ちと地域背景

- ・日高わのわ会は、高知県日高村（人口4,800人、フルーツマトで知られる地域）において、子育て中の母親たちが「子どもと一緒に過ごしながら、地域の困りごとを助けたい」という思いで始まった。
- ・5名ほどの母親から始まり、現在は年間売上1億3000万円、50名の働くお母さんや住民・障がい者で、23事業を展開する組織へと成長した。
- ・設立以来21年間、「年をとっても障害を持っても、その人らしく暮らせる日高村」を理念に、地域の隙間を埋めるサービスを創り続けてきた。
- ・この活動は、国の施政方針演説で紹介され、総務大臣視察や数々の受賞につながっている。

■ 「村まるごと家族」という仕組みと多様な支援

- ・わのわ会の強みは、村全体を一つの家族とみなし、母親的なおせっかいで行政サービスの狭間を埋める「村まるごと家族プラットフォーム」にある。
- ・役場・保育園・特別支援学校・高齢者施設など地域の拠点と緊密に連携し、村の企画課・産業環境課・健康福祉課・教育委員会と幅広く協働する体制を構築している。
- ・活動領域は、配食サービス、買い物支援、ホームヘルプ、家事手伝い、預かり保育、チャイルドルーム、障害者支援、農作業請負など多岐にわたり、村民の生活課題のほぼ全域をカバーする。
- ・年間1,500件を超える利用実績があり、地域コミュニティの生活基盤を支える存在となっている。

■ トマト加工と商品開発による地域活性化

- ・日高村の基幹産業であるトマト農家の規格外トマトの大量廃棄という困りごとを解決するため、わのわ会は規格外トマトの買取と加工に着手した。
- ・年間買取量は20tを超え、ソース・ジャムなどの商品はモンドセレクション金賞受賞、全国的な人気商品へと成長している。この取り組みは、農家の経営改善、新規就農者の安定化にも寄与しており、第一次産業と福祉をつないでいる。
- ・さらに、販売・輸出を視野に入れたマーケティングノウハウを大学と連携しながら獲得し、地域産品のブランド化に取り組んでいる。

■ 子ども・障害者・高齢者をつなぐ共生の場づくり

- ・児童福祉分野では、子ども・障害者・高齢者が共に畑を耕す学びの場を形成している。
- ・また、障害児・健全児を同じ空間で預かり、幼少期から障害への壁を低減する取組を進めている。
- ・高齢者の孤独対策として配食サービスや傾聴支援、買い物難民支援、公共施設清掃など、生活に密着したサービスで地域の困りごとを次々と解決している。行政では埋めきれない地域密着型サービスとして機能している。

■ 今後の展望

- ・地域おこし協力隊と連携し、学生・住民・移住者をつなぐ交流拠点「とまとと」を整備したほか、若者が地域で挑戦できる土壌として一般社団法人nossonがスピンアウトした。関係人口創出、新商

品開発などに取り組む予定である。

【主な質疑】

■ 介護保険外サービス（ホームヘルプ・買い物支援など）の膨大な件数は、制度上どのように運営しているのか。

- ・介護保険外サービスは自費で提供しており、行政制度の対象外となる細かな困りごと（買い物、荷物移動、通院付き添い、墓掃除やゴミ出し、見守りなど）を広く受け止めている。
- ・制度の狭間で生まれる生活ニーズは多く、制度の柔軟性不足への問題意識はあるものの、まずは地域の実情に応じて自ら補完していく。

■ 反対意見を持つ職員や住民をどのように巻き込み、一緒に実現へ向かわせてきたのか。継続の原動力は何か。

- ・反対意見を持つ人ほど強いエネルギーを持っていると捉え、その人を中心に「どうすれば実現可能か」を丁寧に問いかけ、当事者として巻き込む姿勢を重視してきた。
- ・双方の言い分を丁寧に聞き、時間をかけて折り合いをつけることで、納得感ある合意形成を図ってきた。
- ・継続できた理由としては、若手とベテランの価値観の違いを調整する間をつなぐ役割を組織内に持ち続けたこと、そして「困っている人を放っておけない」という姿勢が20年以上変わらなかったことが挙げられる。